熊本日日新聞　平成26年(2014年)1月25日(土曜日)

# 歴史知り 乱用阻止を

## 国民監視

郵便検閲の真実　⑤

### 山本武利・早稲田大名誉教授 インタビュー

GHQ占領下の日本で行われた郵便検閲。昨年、日本人の元検閲官延べ約1万3千人分の名簿を国立国会図書館で発見した山本武利・早稲田大名誉教授(メディア研究)に、郵便検閲が現代に問い掛ける意味などを聞いた。(岡恭子)

―郵便検閲の研究が進んでこなかったのはなぜでしょう。

「資料が少なかったことが挙げられる。アメリカの国立公文書館などでも調べたが、郵便物の検閲を担ったCCD(民間検閲局)の資料は未整理で、全体像の把握が困難だった。GHQやアメリカが日本での資料を整理しないまま占領を終えたからだ。都合の悪い資料は占領末期に焼却、廃棄されており、研究の妨げにもなっている」

―そうした中、元検閲官の名簿が発見されました。

「歴史的な裏付けができた。資料発見前に元検閲官から話を聞いていたが、組織的な関与は証明できないでいた。名簿を丹念に調べると、組織の中身や活動期間、給与なども分かった。名簿を基に、新たに10人ほどの元検閲官にも会うことができた」

―GHQは何を狙ったのでしょう。

「検閲を通じた巧みな情報戦略は、冷戦突入後も日本人が共産主義に傾かず、アメリカに役立つ人間をつくるためのものだった。日本は、お釈迦様の手のひらで操られた孫悟空のような存在だったといえる」

「日本人は、GHQが占領を戦争の延長ととらえていたことに気付かなかった。アメリカのさまざまな文化に接し、『素晴らしい国。以前の日本はひどかった』と徐々に洗脳されていった。日本人としてプライドを持った選択をするためにも、占領下の真実を知る意味は大きい」

―戦時中は憲兵によって、郵便検閲が行われていました。

「いつの時代も、権力者は効率的に国民を統治するため、検閲を好んできた。宿命ともいえ、戦中戦後の郵便物から、今後は電子メールなどに移っていく可能性もある。民主主義国家を主張するアメリカでは最近、米国家安全保障局(NSA)による大規模な盗聴が問題となった」

―郵便検閲の現代的意義とは。

「特定秘密保護法によって、権力によるいびつな監視が不安視されている。確かに保護すべき情報はあるだろうが、行きすぎると郵便物の検閲が行われていた時代のように、いきなり民間人が逮捕されるという異常な事態が起きかねない。権力の乱用を招かないためにも、歴史を知ることが大切だ」

＝終わり

2014・1・25

郵便検閲が現代に問い掛ける意義について語る山本武利・早稲田大名誉教授＝東京都日野市